

第1回セミナー開催

— 協会、対外活動スタート —



わが協会、初の対外活動として、層の拡大及びバースへの理解を深めるという目的で開催されたバースペクティブ・ドローイング技術講座は、各会員諸兄姉の絶大なるご協力により、好評裡に無事終了しました。本誌上をお借りしてご協力頂いた諸兄姉に、お礼申し上げます。

さて、今回、何もかも初めてのこととて、不合理、不都合なることが多々ありました。こうしてことを進めてみて感じたことは、協会活動はいつも何か動きがなければ、ダメだということです。机上だけのプランではなく、動いてみて初めてことが成りたつわけで、これからも積極的に、皆さんのご協力を得て協会活動を推し進めていきたいと思っております。

このたびのセミナーは、講師陣の多彩さ、内容の深さなど、数多くある他のバースセミナーにくらべ、格段の高レベルであったのではないかと自負しております。受講された方々もその点については、よく理解されていたようです。

しかし、反省材料は数多くあり、受講者のアンケートなども参考にして、次回のセミナーでは改めていこうと、教育開発委員会でも話し合われました。

まず、講義のカリキュラムが、幅広くなりすぎ、実技指導の時間が少なすぎたことが、一番の問題で、わずかな時間内で、講義をするには内容が高度すぎたように思われるものもありました。また協会側の姿勢として、ひとつのポリシーを作り、それにのっとって講義を開催するという形に欠けていたように思われます。それは、各講師の個性の強さで仕事のジャンルの違いや、制作方針の違いなどが表面に表れていたようです。

アンケートの回答では、それらも、興味をもって聞かれ、大変好評だったようです。しかし、これらは、各作家の生き方であり、それを、講義、講座の中に持ち込むというのは、セミナーとして、基本を教えるということとはまた違った意味合いのものではないかと思われます。シンポジュームという形式ならば、大変面白いと思うのですが……。

これについては、企画委員会で企画が立ち、会員、準会員を対象に、バースのシンポジュームが開催されることとなり、大変楽しみにしている次第です。

さて、話は元にもどりますが、一本の線を決めなかったというのは、何分にも

初めてのことと準備期間が短かったことなどで、リハーサルもできず、各講師ごと自分の今までの経験で講義を進めようではないかという形になってしまったことも原因にあるようです。

そこで、次回の夏のセミナーでの、カリキュラムは、バース概論、透視図法、基本彩色点景の4つにしぼり、各講座の中に、それぞれ実技をともないながら、光と影、色彩、構図などを、指導する形式にすべきではないかと、先の教育開発委員会で決定し、理事会にこれを諮り、了承を得ました。

講師陣については、これから教育開発委員会で討議を進め決定していく所存ですが、まず一番最初にやらなければいけないことは、対外PRのように思われます。これについては、私どもの委員会内で、広報宣伝担当者を決め、広報委員会のご協力を得て二人三脚でPR活動を推し進めていきたいと、思っております。

つきましては、会員諸兄姉の中で、建築雑誌、新聞、等々にコネクションのある方、教育開発委員会の栗原氏、阿部氏までご一報をお願い致します。

(教育開発委員長 門脇 信夫)



(セミナー最終日講師と共に、工学院大学にて)

主な内容

- * 「技術講座」協会講師陣熱っぽく語る … (1), (2), (3)
- * 関西支部組織、動き出す … (4)
- * バース屋の知られざる世界「筆宮」私自身の巻 … (5)
- * 薫風、会員の声が届きました … (6), (7)
- * 男です！役者です！姓は立川、名は博章でござんす。
「わがアトリエ奮闘記」 … (7)
- * 私のキャリアはバースだけじゃないわヨン「キャリアウーマン」2回目 … (8)
- * 「私感」——技能検定に思う … (9)
- * 建築学会賞に輝く協会名誉会員、高須賀晋氏に聞く … (9)
- * 「マレーシアのレンダラー」美人のゲストをお招きしました … (10)

パースペクティヴ・ドローイング技術講座

多彩な講師陣と豊富な内容に

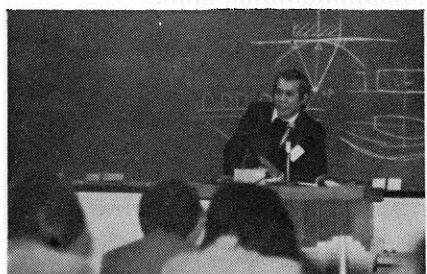
●会場：工学院大学新宿校舎

●期間：昭和56年3月25日～

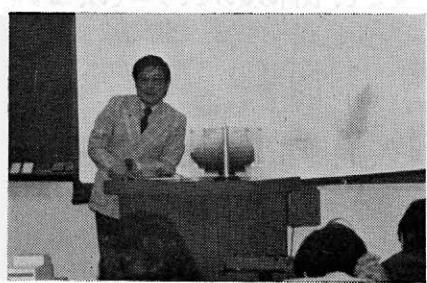
3月28日

●参加者 24名

●講師スタッフ 15名



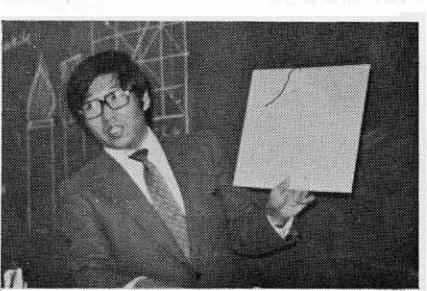
福島講師



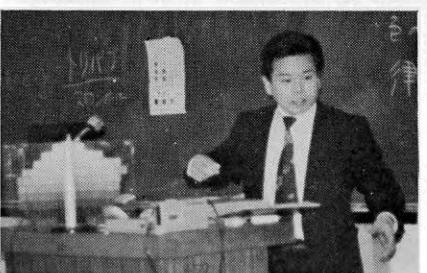
大野講師



門脇講師



福永講師



中野講師

第1日目

基礎編

協会発足以来、初の対外活動として技術講座を選んだことは、資金その他協会の現状において無理なく出来得る最適な企画だと思ったが、急な決行のため準備期間がないこと、それに対象が「高校及び専門学校の先生」というプロの人達であること、などの不利な条件のもとで行わなければならなかった。

基礎編は3日間の日程の第1日目を行い、講座内容はA～Eの5講座に分かれていた。私は、Bの図法を担当することになっていた。図法は高校、専門学校では教課に入っているはずで、A～Eの講座の内でも最も一般化されたよく知られている分野であるため、ごまかしがきかない。それに多人数の前で講義するなどは、あまり経験がない。日常の仕事の一部分を話せばいいというものの、相手が教師であるため、どの程度の内容を盛り込めばよいのか、などの不安はいくらでもあった。

そこで、いろいろ考えてみた点は、私自身の高校以来受けた透視図法の授業で、「どの点」を教えてもらって、「どんな点」が教えてもらってなかつたかを思い出し、特にこの教えてもらってなかつたと思われる点に重点を置き、長年図法を使う仕事をしてきて、気付いた点や、沢山出版されている透視図の本の中に、あまり書かれてない点、又、書いてあっても中途半端な説明の部分にあたる点、これらを私なりに整理したテキストを作成して、講義にあたった。

1時間半の講義を終わってみて、いろいろ配慮したつもりの点が、十分に伝わったのだろうかどうか、相手の反応がよくわからない、平行透視、成角透視、3消点と一通り一度に講義したことが、どうであったのか知りたい気持ちでいっぱいである。いろいろ不安はあったが、多人数の人がわかってもらわなくて、自分の考えを聞いてくれたということは私にとって大変よろこらしいことであった。

この日は、1日中他の方の講義を聴講させていただいた。

A「概論」の大野氏は、慣れているのか、大変に話がうまく、形にはまっていた。

C「用具、画材」の門脇さんの時間では私の使っていない用具、画材があり、使用法とともに大変勉強になった。

D「光と影による立体の把握」の福永さんは本論もさることながら、建築界について海外の話まで盛り込んだ講義で興味深く聴かせていただいた。

E「建築と色彩」の中野氏は、大学の講義でもあれだけの資料を見てくれる講義はないのではないかと思うくらい、豊富な資料を提示しての講義にはおどろいた。

いずれにせよ、今回の生徒である高校、専門学校の教師の方々に失礼かもしれないが、もったいないほど、貴重な内容の講座であったと思う。プロの間で聴きたい話がそこから出ていて、これらは我々協会員を対象に講義していただきたいことばかりであった。

この講座は協会活動の第一歩であり、初回にしては成功の部類に入るのではないかと思う。これも講師を担当した方々並びに3日間にわたり指導に当たった門脇さんと手伝ってくださった人達の協力の上に成り立っている

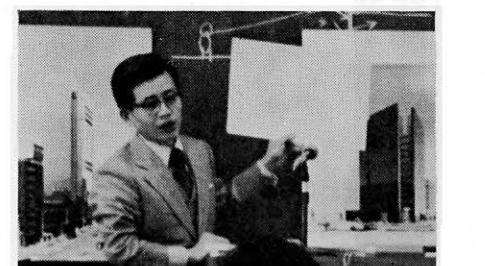
地味な活動ではあるが、今後も回数を重ね、講義内容も整理充実していくことは意義のあることで、協会本来の目的に向かっているのではないかと思う次第である。（福島 昇）

第2日目

応用編

人より一段高い所に登るなどという経験は中高校での皆勤賞『受賞』以来このかたご無沙汰でした。しかも、講師にご指名を受けてからというもの仕事は手につかず、胃の痛むことしきり。当日は、冗談ではなく刑場に引かれる思いで教壇に立つと、なるほど先生の机とは脚の震えを隠すために立つのかと、そこだけ妙に醒めた顔で一人納得したのを覚えています。

さて、拙いなりにもお話しするからには、三段論法、起承転結、何でもよいから筋は通るようにと用意したレジュメも目に入れこそ



森 講師

大好評！

話題集中

持参した作品や拙著がのっけから並べられ、配られた瞬間に、苦心の段取りは雲散霧消、後は参考資料にしがみついて悪夢のような50分を逃げ切ったという感じです。思うところをペン以外の手段で伝えるということは誠に至難のワザと再確認しました。

私に与えられたテーマは「インテリア・ベース」でしたが、結局は私のプレゼンテーション観を脈絡なくおしゃべりすることに終始していました。しかも、個別テーマから離れて、レンダラーの在り方（職人でありクリエイターである）とかプレゼンテーションの意義（幾何学的作図でも絵画でも実現できない）といった精神論・抽象論ばかり操り返していたのですが……反省しきりです。

かくの如く、自分の持ち時間のことだけでも頭が一杯だったため、全体を見渡しての批評や提案を寄せる資格はありませんが、一つ二つ希望を述べれば、まず気軽な雰囲気の会場での小クラス編成のセミナーにしていただきたい。そうすれば、講師の膝の震えや舌のもつれも軽減されることでしょう。もう一つ、協会や他の講師の方々の参観には実にマイリしました。お気付きの通り、父兄参観日の新米教師もかくやと思われる私の狼狽ぶり、どうぞ口下手の同輩にお心遣いをお願いします。もっとも、私自身、次回は断固お役ご免をこうむります。「教壇に立って知ったる高さかな」

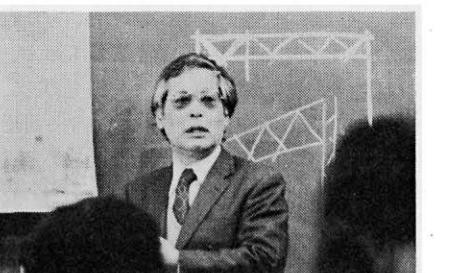
（水戸岡 鋭治）

第3日目

実技編

私が担当したのは、最終日のドローイングの時間であった。

着彩のプロセスを、より具体的に示すためにスライドによる着彩順序の紹介から始めた。受講者は熱心にスライドを見ていたが、いざ着彩となるとなかなか、思うように手が動かない。中には経験者もいたようであったが、大半は、初めて絵筆を持ったような人のようである。時間を区切ってプロセスを追うわけであるが、昼休みの1時間を除き、夕方までの6時間、息つく間もない緊張の連続の



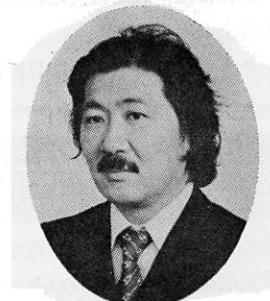
深谷講師



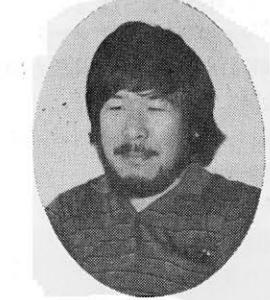
着彩実技風景 種橋講師／南 講師



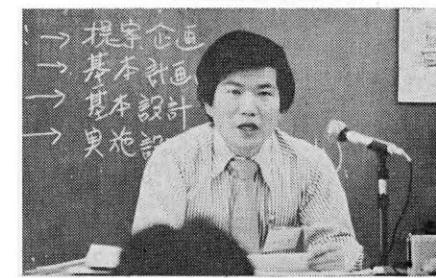
会場風景



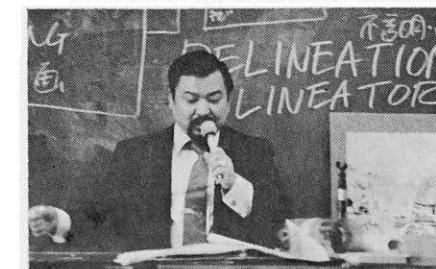
山城講師



大平講師



佐々木講師



松鷹講師

企画委員会

原画展（仮称）開催の準備をすすめていますが、今秋開催のメドがつきましたのでお知らせ致します。先日のニュース掲載内容と基本的には変更はありませんが、原画の入手が困難な方もいると聞いておりますので、全紙程度のカラー写真も受け付ける方針です。

この号が発刊される時点には、関西の会場も決まっていると思いますが、いずれの会場においても出品数が限定される場合もあるかと思いますが、よろしくご了承下さい。

会員名簿の作成を急ぎ進めることになっておりますが、住所勤務先に変更の生じた方は早急に事務局までご連絡下さい。

教育開発委員会

6月27、28日に開かれる総会のための準備委員（各委員会ごとに3名）

総会のプログラム、段取り、28日に行うレ

理事会報告

協会事業の実施、関西支部の活発な動き、56年度の役員改選などで定例会のみでは消化出来なくなってきた。5号紙以降の状況は下記の通り。

2/20（於ヒューマンファクター）

- 2/18に行われた中央職業能力開発協会との会談について報告

- 第1回バースペクティブドローイング講座の実施要項討議

3/6（於ヒューマンファクター）

- 上記講座の具体策検討

3/17（於日建）

理事会の定例日を第2火曜日に変更
・支部設立に伴い会則改定討議
(素案小西氏に一任)

4/21（於日建）

- 関西支部の常任委員会、委員会に理事会より人員派遣積極的に計らう
- 通常総会の開催地検討

- 技術講座の反響高く、引き続きシンポジウムを計画

5/12（於日建）

- バース原画展を秋開催を目指し会場物色中

- 佐々木理事より6号紙編集状況報告

- 通常総会の開催地決定

- 役員改選方法討議

5/26（於ソフィア六本木）

- 支部設立、役員改選の会則一部変更改正案検討

- 夏期実技講座実施決定

委員会報告

クリエーションの計画、段取り、来賓の送り迎え、部屋割りなど

一泊して2日というものは問題がある。経費、仕事の都合、日帰りで名古屋の駅近辺のホテルでやれなかったのか。関西からの強い要望で、中間地点ということから決めたのがもし欠席者が多い時は考え直す必要あり、26日の理事会で、もう一度はかかる。一番の目的は総会なのだから、できるだけ多くの人が出席可能な場所を考えるようにしたい。

先日のセミナーをもう一度やろうということが理事会で出ている。やっと一つの活動として出来たセミナーなのだから、一度きりでやめないで続けることにも意味があるのではないか。セミナーに関するプロジェクト・チームを別に作り、理事、委員長という肩書きとは別に進める事は出来ないか、協会として利益を追求する販売・事業部等を作ってはどうか。

新入会員 大和ゆみ子氏紹介

広報委員会

広報委員の各メンバーは、5号紙について内容等の反省会を行い、6号紙の編集方針を決定し準備を進めます。

4/7（於ヒューマンファクター）

- 5号紙の内容の反省

4/13（於シルバー）

- 協会誌発行7月3日予定、広告取材は広報委員会以外にも協力を要請する、等の他、編集内容の討議を行った。

4/30（於シルバー）

- 協会誌6号編集会議
- 新入広報委員 西島勝氏 尾上利香氏 田中啓子氏 中村勝彦氏の紹介

5/14（於シルバー）

- 編集会議と6号紙のレイアウト

5/21（於六本木メイクアップアカデミー）

- 編集会議

5/28（於神田YMC A会議室）

- 編集会議
- 6/4（於YMC A会議室）・編集会議

関西支部報告

——関西総会の準備会開く——

すっかり暑くなってきて、半袖のボロシャツでも良いかなと思えば、又急に冷えこんだ日があって風邪をひいたり又車に乗ればクーラを入れたり切ったり、まったく扱いにくい日々が続く今日この頃です。御堂筋のイチョウや生魂神社の楠も新緑が目にまぶしくまさに初夏の趣ありといった大阪です。

去る4月24日、大阪の日建設会議室において関西総会のための準備会が、東京から事務局長小西さん、理事大野さんを迎えて開催されました。その席上これまでのA Rの関東における活動報告と今後の進行具合等についての説明を頂き、又関西役員各位の委員会分担ならびに今後の関西における委員会運営の大まかなアウトラインが討論され、各委員会とも熱っぽい討論がくり返され、予定の時間を1時間ほどオーバーし後日あらためて、個別に会議を開くということで終了しました。

わが広報委員会も例にもれずこの5月20日に道頓堀は松竹座の前の喫茶店「凡」において関西における第1回の広報委員会を開くつもりでおりますが、「ど根性」、「いちびり」が売りものの関西勢、本部に負けないおもしろい内容を、一同発奮しております。

バースにおいては、そのテクニック、又待遇等関東、関西地域柄により若干の差があると聞き及んでおりますが、レンダラーの作品に対する心意気には相通するものがあると思います。

私達レンダラーにとってコンペのバースは非常に気を使しながら描くのです。それというのも、応募された数社からのバースが横一

「私感」

——作家の姿勢に見る信頼感——

芳谷 勝瀬

最近地方自治体による設計指命コンペが急増し始め、コンペを取りまく、諸問題が提起されている。あるコンペでは、応募要項を無視したものが当選する

ということさえ、でてきております。コンペはあくまでも、要項がルールであり、同じ土俵で競い合ってこそ、設計競技となりうるのは当然のことです。

そのコンペに付きものが、バースでありその要項を見ると、外観バース彩色仕上げ、サイズA2、画用紙裏打ちしたもの、といった程度が一般的に多く、少し内容のあるもので、アングル、表現方法を指示しているもの、又、まったく自由なものまで、その主催する自治体と建物の規模、コンペの内容によって千差万別です。

私達レンダラーにとってコンペのバースは非常に気を使しながら描くのです。それというのも、応募された数社からのバースが横一

列に並べて審査され、一見すれば、建築デザインは勿論のこと、レイアウト、ボリューム、環境との調和といった設計者の意図するところの概要をつかむことができ審査に大きな影響を与え当落にかかわるのです。最近あるコンペの結果が公開され、同じボリュームの建物でも描き手によって、このようにまで、違った表現となるものかと驚いたことがあった。その設計要項の一つに環境を重視してそのファサードのデザインに重点をおいたコンペであり、バースのアングルも指定されていたのです。その中で、あるものは建物の長さを2倍近く表現していたり、周囲の環境を無視しているものの、窓の開口部や庇の出の長さ、建物の外壁仕上げの材質感といったことが設計図を見れば、とうてい考えられない表現になっているのです。

このようなことは私達が日常経験していることではあるが、今後レンダラーの責任のもと改めなければ、バースに対する不信感をいかせ本來の建築バースから逸脱した形態になってしまってはとんでもないことです。

コンペのバースもできるだけ同じ土俵を作る意味においても、バースの要項を次のように提案したいと思います。

① バースの大きさ B2 サイズ（建物の規模により多少変えてもよい）

② 枚数とアングルの指定（設計や立地条件にもよるがこの方向からが望ましいといったもの）

③ 表現方法、用紙他一切自由とする、但し彩色仕上げとし、図法に基づき不自然にならないもの

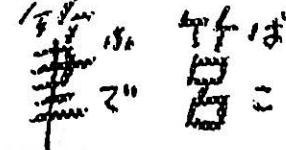
④ 体裁は額縁入り（ガラスは重く、割れる心配があるのでアクリルが良い）

といった程度であればわかり易く親切ではないでしょうか。なぜこのようなことを提案するかというと、未だにケント紙に着色せよとか、バースのサイズにしても建物の規模からして小さすぎたり、体裁は、裏打ちしてアルミフレーム枠程度といった理解し難い説明となっているからです。以上コンペのことについて勝手なことを言ってきましたが、最後にバースのことで私の考えを少し述べておきたいと思います。私達レンダラーにとって一番大事なことは、ただ与えられたものを描くという作業に終止することなく、建築に対する幅広い知識を身につけ、設計者との意志疎通を図り、設計意図を正しく伝達し、かつ設計アイデアを触発して、建築の魅力を十分訴えるバースを描かなければなりません。

レンダラーズ協会も発足して1年になりますが、レンダラーの社会的知名度を高めるには、あくまでも、私達の自己の日常的な努力と、個々の振る舞いの中にあるということを忘れてはならないと思います。

（関西支部委員、日建設会大阪本社）

連載（2）

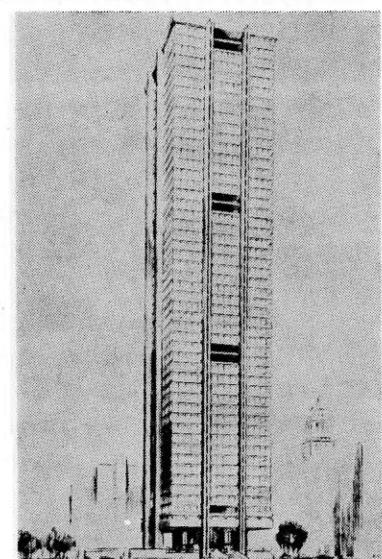


光藤俊夫

な絵に教えられることが多々ありました。まあ、その様態については別のところ（住宅ベース集「わが青春のバースペクチブ」グラフィック社）で書きましたからここで省くとして、とにかく、それからというもの、毎日毎日「バース」ばかりの明け暮れでした。それでも1日に5枚ということもあり、まだまだテクニックも未熟であったにもかかわらず、年間に千枚近くも描きまくっていたのですから、今から考えてみるとオソロシイ話、ということになります。

そして、ほとんど「バース屋」一年生とでも言うべきこの頃に手がけた大手町の貿易会館や東京産業会館、あるいは朝日新聞社（有楽町増築部分）や丸の内日活劇場などが今日姿を消し、新しく生まれ変わったり、生まれ変わらうとしていることに大きな感動があります。

やがて私も「たった一人」ではなくなります。昭和36年の春、五分刈り頭の学生服、一見内気そうで、しかし神性のありそうな風貌の青年（山沢博）が、「バースを描きたい」という希望で、私のもとに配属されて来たのです。



昭和37年画
アルゼンチンブショービル
(絵とタイトル筆者)

私のパス考

大平 善生

竹馬の友の兄上という関係で、塙田氏の事務所に入れていただいたのは、多少油絵等をやり、絵描きに憧れていたためでしょうか。

とにかく最初は「パス」という言葉さえ知らず、建築について全くの素人で、用語の意味から一つ一つ教わり、「パス」は実に制約の多い絵であること、そしてその条件を満たすために、基本的知識の必要不可欠なことを知り、特に建物を、物としてとらえ、その質量、影の流れ、遠近感等を、時には写真以上にめりりを持たせて仕上げてゆく技法には、非常に興味を覚えるとともに、とまどいを感じたものでした。

特に初めて塙田氏より作品を見せていただき、その非常に現実感のある（実際の建物よりもはるかに色彩の多く満ちみちているにもかかわらず）シャープな、そして、スケッチのようなトリミングされた、画面から（今まで知っていた絵画とは、かなり違った）鮮烈な印象を受けたことを記憶しております。

いわゆる絵画においては、印象派の一つの考え方である「物には個有色がない」とか、心象による風景とか、（ユトリロのように）建物を含む風景も情景として捕えるとか、その感情による心象を重視する、という点が、「パス」と大きく異なるところだと思いますが、しかし「パス」もひとえに、絵画の一分野であると思えるのは、私一人の早とちりではないと信じますが、「パス」はその扱われ方において、個性を云々されるのではなく、多くの場合、対象物の、的確な表現の是非を問われるのが、純粋絵画と異なるところですが、かといつて、（写真のように）答えは一つという訳でもなく各々（似て非なる）個性的世界を開拓させてゆくことには変わりはない訳です。

当初、塙田氏や福永氏の絵を教科書としてガラスの描き方、打ち放しの描き方と、悩みつつ描いておりましたが、これで良し、という答えがある訳でもなく、未だに一枚ごとに脣心しつつ描いている始末で、多くの先輩諸氏の絵を、座右に置いておりますが、なかなか、「パス」の持つ制約、諸条件を満たし、自分でも納得のゆく絵を描くことは難しく、道は遠い感じです。

先輩諸氏の幾人かからは、自分自身惚れするような、作品が出来る時があると聞きます。しかも実際に、それは誰が見ても良い出来であることは間違いないことは、その方独自の画境というか、世界がある訳で、「パス」においても、それが結局は一番大事な点であると気付かれる訳です。反面、多くのパンフレット等に見られるように、誰が描いても大差ないというような（私も含めて）没個性的というか、まだまだという人達も多く、

「パス」の世界も実に奥の深いことがわかります。私も一人で仕事をしたてから何年か過ぎ、全く井の中の蛙おりましたが、当協会を通して多くの方々を知るにつけて、自分の勉強不足を痛感する次第です。

描くことにしがみつきたい

近藤喬枝

東京オリンピックの年、私は「お嫁さんになる」という以外自分の将来を考えたこともない、主体性のない平凡な女の子でありました。まあ現在もその延長線上にいるわけですが…。

婚約し、なんとなしの稽古事に過ごしていたある日、ある方が「パス事務所を作るので人を揃している」という話を持って来て下さいました。パスには学生時代から心ひかれるものがあったのですが、グズグズと迷う私に紹介者は、「何でもやってみなくちゃ始まらないよ」と叱咤激励して下さいました。そこで私は学生時代の作品を持って清水・建設・高須賀氏の所へうかがったのです。



その事務所はデザインコーナータナといい、高須賀氏と後のドーム社長成瀬氏とで始められる新パス事務所でした。作品は見られたものではなかったはずなのですが、高須賀氏は大変やさしく応対して下さり、どういうわけかタナの社員となることが出来たのです。そこで大野、福永、山沢氏と出会い、手取り足取り教えていただきました。

それから結婚、出産と大多忙の中、日本も音をたてて列島改造の嵐、建築ブームとなり私もその中で夢中で走り続けて来たようです。そしてわが家も子育て期を終わり、周囲も又静かな定期に入ってきた。一息ついで周りを見るゆとりも出来た昨今考えることは「男性レンダラーのあの自信、力は何なのだろう。仕事はやはり生活をかけてするものじゃないだろうか、仕事に対する姿勢が甘いのだなあ」という反省の気持ちです。仕事に対する意識とか迫力という点で何か違うものを感じます。これは男女の差でなく私の生来の意気地ない性格からといえるかもしれません。

学生時代の友人も「エッ何であなたが仕事なの！」と久しぶりに会うとびっくりします。私の学生時代は安保の学園紛争の真っ只中、勇ましい女性闘士が、身近にたくさんいたのです。その人達が静かな主婦となり、全然その気もない私が、仕事を続けている。人生ちょうど、仮に、木造建築の表現にすばらしい感

覚を持った作家がいたとして、この作家にオールマイティな技術を求める必要はない。また建築全般にわたって正確な表現の出来る作家に、あえて芸術性を求める必要もない。それぞれの道でオーソリティであり得るし、両者は学習の途上から歴然と別な道を歩んでいたことが解るだろう。

しかし、私は現在、無意識の内に二兎を追っているのかも知れない。

パスも一つの芸術か

岡 陽子

やってみたいという漠然とした理由だけで何もわからない私は、レンダリング R I Y A に強引に入社させてもらったものの、忙しく筆を進めておられる刈谷所長や、諸先輩の作品を横目で見つつ、日々感心するばかりで自分の練習は思うように進まない毎日でした。

図面が届き、まず色々な角度からスケッチがなされ、下書きに取り掛かり、計算された順序で色が重ねられ、一つの空間が出来上がり、最後にネームが入れられるまでの一連の仕事を見ながら、その巧みさに驚き、不思議な気持ちでいたものです。

まずは練習するものと思い、休日を利用して描いた練習作品を、所長に見て頂いた時のこと、しばらく眺めて「ウーム！」と言われただけで批評らしい言葉は少なく、もっともっと練習すること、絵を丸めておいたため少し折れかかっていたので、大切に扱うことぐらいでした。少し拍子抜けしていたところが、気の弛みとは逆にやらなければならない事柄が、目の前に実に多く山積みされていることを知らされ、教えられていったでした。

パスを描く上で必要な、技術的な練習は勿論のこと、常に矢のようなスピードで建っていく建築物を知り、又それを正しい目で理解することから、地球上のありとあらゆるものが、パスの対象となり、描かれるもので、日常の全てをパスを描く目で見、考えていくなければならない。又パスを音楽にたとえて芸術性の高い音楽は作曲家と演奏家の、思想と技術が高くなくてはならないように、勝れたパスは、勝れたデザインと勝れた技術によってこそ創られるものであり、パスは一つの芸術になり得るのだということまで、実際にこと細かく教えて下さいました。

時には仕事中でも、芸術論や人生論にまで及び、無用の抵抗とは思いつつも、拙い自分の考えを述べたりもしました。これも全て、「パスとは？」から始まったもので、実に情熱を持って多方面において教えて頂いたことの重さを、パスを描き続ける年数が重なるに従って感じております。

今でも時折「見よ、考えよ、手を動かせ」という言葉が聞こえて来るようです。

地方で頑張ってます

青野 千賀子

静岡に来て足かけ4年、あっと言う間に過ぎてしまった。来る前は果たして仕事があるかどうか心配だったが、まわりの人、特に姑に励まして、現在に至っている。

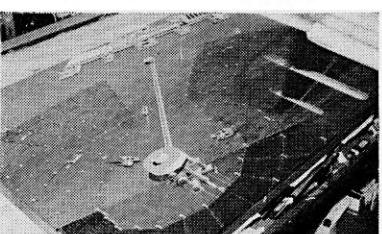
静岡県は、東部、中部、西部に分かれています。沼津市、静岡市、浜松市がそれの中核になっている。西部（浜松）には、パス事務所らしきものが、1、2あるが、東部中部には練達の士は無いに等しい。これは2年ぐらいしてわかったことなのだが。中部を中心に東部西部に手がかりを得られ、現在は20数社の得意先をかかえて、まあまあ順調にしている。20数社と言っても、1年に1~2枚というところもあり、忘れたころに仕事を出してくれるところもある。

エピソードと言っても、特記することもないが、自宅から浜松が一番近いところからま

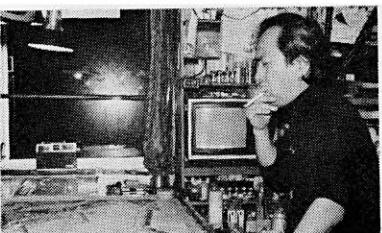
ざ浜松へダイレクトメールを出した。しかし手ごたえはなく、やっと半年後に、小さな、設計事務所から一枚、つづいて同じような規模の事務所から仕事をもらつたときは、ホッとした。その後も徐々にではあるが仕事量もふえてきたが、まだ暇をもてます時もあり、今度は、静岡、清水方面にダイレクトメールを出した。これは、2週間後に早くも仕事が飛び込んで来て、最初から静岡に出していればよかったと思ったのだ。

そうこうしているうちに、口込みの仕事もふえ、時には仕事が重って、うれしい悲鳴をあげることもある。

良い空気と山々と緑にかこまれて、朝は小鳥のさえずりで目がさめる。子供の教育の環境にも恵まれ、1時間で静岡市にも浜松市にも行けて、東京にも日帰りできる。ここへ来て本当に良かったと思っている。ただ冬のから風には悩まされるが。東京に住んでいた頃には、こんな生活は思ってもみなかつたことだが、もうあの喧噪の中へもどる気はしない。



製作中の作品



アトリエでの筆者

アトリエ訪問

立川博章

海洋開発デザインと、そのうえ足りずに、研究所、つけもつけたり、長たらし、わけのわからん看板を、かかげて早くも、13年、この看板と同様に、わけのわからん商売で、めしを食ってる、立川博章。

どんな仕事を本業にしたらよいのかご当地人、全くわからんまでいる。

建築物の設計と、時には、たのまれレンダリング、百科辞典の絵もかいて、本の挿し絵もたまに描く、粘土いじりはつれづれに、昔とったる杵柄で、彫塑もどきもいたします。

大学教授の友からは、頼まれば、むずかしい、プラント設計等をし、気が向いやその上、レンダリング。気分転換、潜水士、アクアラングを身につけて、一人静かに海中散歩、あっちこっちの役所から、海中展望塔とやら、つくって下さいおねがいと、またまた注文、海中調査、ヨット遊びや、海づくりと、マリーナやら、海づくり公園、レクリエーションとやらで、あれやこれやと庭づくり、大阪万博、沖縄の海洋博とか博覧会、言い出しちゃや音頭とり、忘れたころにいしえの、テレビ映画のキャラクター、モンスターなど、デザインと、変わり種では、ぱっちゃんじょうちゃん、ミクロマン、リカちゃん人形つくり、少ないヒマには、たわいのない、せっせとつくるプラモデル。どれが仕事で、遊びなのか、遊びが仕事で、仕事が遊び、何が何だかさ

っぱりわからん。

夢中になると舌なめしり、あきては途中でほほり出し、目移りすれば鞍替えで、気に入り仕事は、ほいほいと、いやな仕事は、ちっともやらず、事務所つくれば、ヤングメンいらいら続で、気にくわづ、やめたやめたとすぐつぶし、お客様にも文句言い、めんどくさいこと大嫌い、商売べただと人からも、かみさんからも言われっぱなし、よくも続いた13年。そんな移り気、家庭をこわし、別れる切れるとスッタモノ、二度三度と女房を変え、子供は二ヵ所で四人もつくり、やっと落ちつく年のせい。徹夜徹夜でかせいでも、ちっとものごらんみり錢、いつもビービー渡り鳥。
「渡り鳥今日は何処へいったやら
多感な人生ここにあり」

キャリアウーマン

AR会員 企画委員 平原 明子
アキ・アトリエ代表



山あいの峠道、往復二車線、右に左につづら折れだ。陽が大きく西に落ちこんで、たなびきはじめた雲が、陽を受けて、せつないほどの黄金色。ふと悲しくなってしまうような淡い残光の中に風が止まっている。

スズキ GSX400E で走る私の前を、ホンダの青いCB750F が行く、そのままに前が、ホンダのCB650カスタムだ。CB650がトップ、だから私は3番目だ。右に左にカーブのリズムをつかんでパンクさせ、アウトへはらみ気味に出てインをかすめ、カーブを抜けて行く。きついカーブにさしかかる。左まわりだ。先を行く2台の大排気量のエグゾーストがかさなりあいシャーンというような音になって後へなびいて来る。トップのホンダCB650 カスタムが豪快に車体を倒した、サイドスタンドを路面にこすりつける。銀色に光る排気管から後輪にかけてまっ赤な火花が夕暮れの淡い灰色の空気の中に、いくつもこまかく鮮やかに、飛び散った。きれいで。

ホンダCB650カスタムは、大きくかたむいたまま、ヘルメットの脳天を見せてカーブのむこうに見えなくなる。

ホンダのCB750F がそれに続く。まったく同じように車体を倒し込む。カーブの中の同じ地点で、スタンドで路面を割りとて行く。夕もやに火花。黒い後輪の前に、ぱっと

一瞬赤い花が咲いたようだ。消えて再び火花。両肩の峰、それにヘルメットのてっぺんを後ろの私に見せて、路面と平行になる感じで、ホンダのCB750F もカーブのむこうへ飛び込んで行く。私の番だ、トルクをかけ左肩を思いきりよく落とこむ、両脚と腰でズズキを寝かせる。路面を削るぞ！ 重い衝撃が伝わってくる。スタンドが路面に触れていく。火花だ。先を行く2台と同じように、アンダーに火花がきれいに散っているだろうか。フルに車体を倒しスタンドを削りつつカーブを抜けながら。

私は左下に顔をむけた。アンダーのぞきこむように右肩をあげ頭を下げたとたん、バランスを失い、みごとにひっくりかえってしまった……。

バーチカル・ツイン・4ストロークエンジン、前進6段。回転をあげタンクをだきこむ。カウルからヘルメットの頭上へと風が流れて行く。高速回転のエンジン音と心臓の鼓動とが重なりあい、心地良い響きとなって、女心を搔き立てる。深夜すっかり人気のなくなった大都会のビルの下をスズキと走る。素晴らしい色が出た時、メチャメチャに濁らせてし

ころです。皆さんを見るとそれぞれ自分の個性を持ち、それを武器にして仕事をしている方ばかりで私などはまだ勉強不足という気がしました。

私の場合、自宅で主婦の仕事のかたわらの仕事で子供もまだ小さいし、とてもキャリアウーマンとは言えない状況です。子供もなるべく、手許で育てたいなどと思っているので、(それでもやむなく預けることもある)仕事をしている時は、子供をはらいのけながら最悪の母親でやっています。ですから、現在の最大の問題は、やはり家庭との両立ということになります。

男性が仕事に没頭出来ると違って、女の場合は、様々なハンディを乗り越えて、仕事をするのですからなかなか大変です。家事、育児に時間を取られながらカリカリしてやっていますが、全体として眺めると、そういう時間があることで、結構気分転換をしている気がします。仕事に没頭して自分との戦いをしている時はもちろん充実していますが、仕事のない日など、子供と近くの公園へ行き日光をサシサンと浴びながら芝生に寝ころんだり、

また時、後は決まってスズキと一緒にあります。この時ばかりは、アウトローの時間である。

明治公園にはほど近い古びたマンションの一室に事務所を構えて、7~8年は経ていると思う。新宿御苑、明治神宮、代々木公園と緑は豊富。春夏秋冬を肌で受け取られる。首都高速の地獄道をくぐり抜け、バッタと緑が目に飛びこんで来た時、ア！ これは絵になると直感しここに住みついてしまった。純粋芸術とやらにくく、西洋絵画に没頭したのもつかの間この物価の現実では、やはり背に腹はかえられぬ、とつい手を出したのがこの世界。新芽があふき、青葉となり紅葉し排気ガスの中にヒラヒラ、ハラハラと落ちて行くのを何度か見た。何度か見ているうちに今ではキャリアウーマンとか、飛んでいる女とか、おだてられ、本人もその気になったりするから誠にこっけいなものである。すさまじい商業ベースに押しまくられ、それでも報酬を受け取る時はプロなんだ！ レンダラーのプロになってしまったという恐ろしいほどの責任と義務感がドサッと頭上にのしかかってくる。さいわいにして師匠に恵まれ、弟子も得、なんとかキャリアウーマンの面目をたもつていてある。季節が猛烈なスピードで移って行く、キャリアウーマンも昔のものとなった、時の流れの速さにバイクをのせて今夜も又一緒にフッ飛び。いつの頃からバイクに乗り始めたのか、いつの頃からベースを描き始めたのか忘れてしまった。私には過去はない。振り返ることはしたくないです。何故って？ もうひっくりかえるのは沢山だから。

ただ絵が描けるということで安易にベース社会に入っていく傾向があるみたいだし、それが、なんとなく今の主流になっているみたい。グラフィック関係の方から多く入って来てると思います。ですから若い建築家達の中

軽くジョギングしたりする時間もすばらしく思えるのです。葉のすっかり落ちた木の枝の向こうの青空を見上げたり、松ぼっくりを探して歩くことも、忙しい時には出来ないだけに一層新鮮に感じられます。そんな時はなんて良い親子関係だろうと一人悦に入ります

こんな私ですから、急ぎの仕事はやめて、余裕を持って描きたいなどと勝手なことを思っています。こんなわがままは、今のところ生活がかかっていないから言えるのであって、皆さんから“甘い”と言われそうです。

しかし今はそれで良いと思っています。育児は今しか出来ないけれど、仕事はずっと出来ます。そう思って一つ一つの仕事を大切に、と心掛けています。

マラソンで言えば、今はちょっとベースを落として呼吸を整え、周囲の景色などを楽ししながら、それでも歩かずに走っているといったところでしょうか。

この協会に入ることにより、皆さんとの横のつながり、又情報を通して仕事の上の良い刺激を得たいと思っています。

どうぞ、よろしく！



東京女子短期大学卒
現代構造研究所、フクナガ・
レンダリングドームを経て
現在フリー 北海道出身準会員
ベース歴7年。

中門 静子

80年代は女性の時代と言われ、マスコミでも女性が目立っていた昨年でした。私も今年はより良い仕事をしようと気持ちだけは、張りきっています。

先日 A.R の総会に初めて出席して、沢山の方がいらっしゃるのに驚き、そして女性が少ないので驚きました。実際には、もっと多くの女性がこの仕事を携わっているのではないかでしょうか。そういう私も近頃やっと自分で仕事をしていると思えるようになったと

建築家に聞く

② 高須賀晋氏

建築学会賞に輝く名誉会員



—最近の建築界はいかがですか。雑誌なんかも増えて、若い人が台頭してきたという感じに見受けられるんですけど。

要は“住む”とはどういうことかということなんですね。ひとりの人間が「こりゃ住めない」と言ったって、またひとりの人間が「住める」と言えば住める訳で、他の人がいくら住めないって言ったってね。だから“住む”ということは何か、ということになる訳ですよ。今現在、マンションが多く建っている中で、ほかの建築物と対照しても、マンションの価値はどの辺にあるかということですね。結局マンションってのは住み心地の良し悪しよりも、買った人が10年後にそのマンションを売るかもしれない、買ったはいいけどいざ売るになって特定の人にしか売れないんじゃあ、マンションとしての価値は下がる訳で、ですから、マンションは設計の妙味なんかよりもそっちの方にむしろポイントがあるんじゃないですか。

—今のレンダラーに対するアドバイスを伺いたいんですが。

ただ絵が描けるということで安易にベース社会に入っていく傾向があるみたいだし、それが、なんとなく今の主流になっているみたい。グラフィック関係の方から多く入って来てると思います。ですから若い建築家達の中

なぜ「建築透視図製作」なのか。

技能検定は、労働者の有する技能を一定の基準によって検定し、これを公認する技能の国家検定制度で、職業訓練法に基づいて行われています。その職種の選定にあたっては、社会一般のニーズや対象労働者数、教育訓練の実施状況などを総合的に勘案して、必要度の高い職種について実施するを基本方針とする、とされています。そして、「建築透視図製作」という職種も検定の対象として昭和51年、中央職業訓練審議会の専門調査会でとりあげられ、建築ベースについて、その現況、背景などについて調査、審議されました。そして昭和52年6月にはトライアルとして試行試験が行われ、現行の検定制度に組み込まれました。

それではここで、その技能検定について2、3考えてみたいと思います。まず、この技能検定には、すでに建築の関連検定職種として「建築製図」や「テクニカルイラストレーション」などがとりあげられていますが、果たして「建築透視図」についても、同じよう

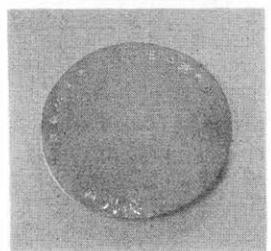
いうことです。今レンダラーがどんな絵を描いているのか、さっぱりわかりません。線を中心として描いてる人も、何でもかんでもヤコビという風潮にあるみたいだけど、ヘルムート・ヤコビなんかはひとつ独自のスタイルを造った人ですよ。

私達が描いている時のベースも、それが今どういう部分で変わって来ているかということですね。日建みたいな形で展覧会を開いて、出品された絵を観れば、最近の絵の傾向がわかります。その時に光藤さんに頼んで絵の2、3枚を、是非出品して頂けたらと思いま。それが今、どういう部分で変わって来てるか、絵の変化だけではなく、ベースがどのような形で、今日まで発展して来たかということですね。とにかく今のベースに対してのうんぬんは、その展覧会を見てからですね。それからにしましょう。

(取材 広報委員 山沢 博)



学会賞盾



いずれにしろ、建築家か、建築士かの関係にも似て、ベースの描き手である我々にも、これらの二面性は本来持っている両刃の剣ではないかと思います。また、この制度の技能五輪大会などにいたっては、日々の制作これ、実の技能大会でもあり、じつに酷なおはなしではあります。またもうひとつの点として受験資格があり、実務の経験年数なども厳しく、たとえば一级の場合実務経験のみとして14年、ということをとりあげても、この職種のばあい、一考されていいとも思われます。

ともあれ、我々はこの検定制度を考えとき、この技能を「製作」ならぬ「制作」としてとらえ、その表現を規定することなく、ひとつの職能格として、対外的にひろがりのうちに活かし、技能講座や用語の統一等も含め企画、教育、広報などを通じて、社会一般に対するパブリシティ活動として、このレンダラーズ協会として、より太く、より深く、より厚くひろげていけばと思います。

(広報委員 中村勝彦 中央技能検定協会検定委員 YMCA講師)

技能検定に思う

な検定の内容である製図作業や、その対象とする技能の範囲としてとりあげられるかという点です。たとえば「建築製図」についてみると、その検定の求められる内容は、製図作業で、その対象範囲も、「建築物の製図および写真に必要な技能」とあります。これは建築を設計する建築家あるいは「国民の生命財産の保護を図らねばならない」建築士ともが、製図技能者としての関係にあります。このような建築ベースを考えるとき、その検定職種名としても「建築透視図製作」ということがあります。すなわち、制作ならぬ、衣をつけた製作という名称になっていることでもあります。

ところで、我々レンダラーにとって、ベースの制作作者なのか、あるいは製作士なのかという問題は、いろいろなみかたがあり、そのこたえは我々自身のなかにあるもうひとつの課題としてとりあげなければなりませんが、

SPOTLIGHT FOREIGN COUNTRIES GUEST CORNER

Miss NG FOO LANG
ン フー ラン



つい最近まで、マレーシアの建設業は一番良い職業だったと言えるでしょう。土地を買って、単純なデザインで家を建てて売るのが盛んだった。ところが、今は発展の度合いの早い社会とともに、住まいの外観と室内設計が厳しく要求されている。いわゆる部屋が多い家が良いという見方がだんだんくなっているわけです。人口の増加や経済の進展など、土地の利用法もかわってきている。高層住宅（FLAT）、連続性住宅（TERRACE HOUSE）が建てられています。街を歩いていると古い建物はオランダ、ポルトガルとイギリスのなごりがみられるが、最近は高層（17F～20F）の建物や近代的ビル、BUSINESS COMPLEXが建てられています。

私が日本に来た理由の一つとして、日本の優れた建築設計技術、知識を修得しようという目標があります。将来のために、いまから自分が実力をつけて置いたほうが良いと思い、海外技術者研修協会（AOTS）を通じて、研修生として、清水建設でバースとインテリアの研修を受けています。ここではほんとうに迷惑をかけながら、学校で勉強した基礎と違って、実際の技術を学んでいるのです。

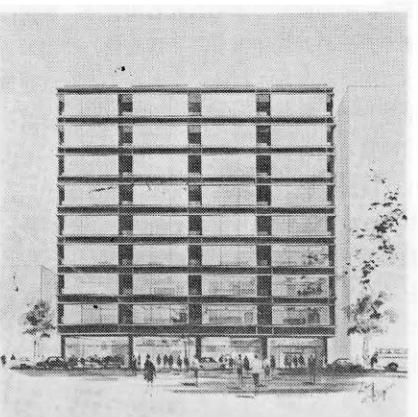
日本に来て3年、私は日本の建築に関する感想がいろいろありますが、特に、深く印象に残るのは日本の家です。日本の家というの



は単純に言えば小さいです。外側から見ていると、あまり特徴のない家と思われるのが一般的です。思いながら、中にはいって、拝見してみると、びっくりするほどものがいっぱい置いてあります。インテリア空間に対して、とてもうまく処理され、各空間の使用目的も明確であるのがすばらしいです。色の方もうまく組み合せているのがすばらしいです。もっとも日本人の住まいに対する要求は、一般的に言えば、よい居住空間と快適性に恵まれていること、それには機能的に使い良さが確かめられることを中心に、検討してから家を建てるのではないかと私は思います。将来は、マレーシアも、日本人みたいに家に対する要求が高くなるでしょう。

これまで約2ヶ月間は研修の最初の段階ですが、建築に対しての感想は、日本の建築技術の発達で、建物のでき上がる速度が非常にはやいということです。建築の設計は種類が多く、バースについては種類も描き方もたくさんあり、設計の中では非常に重要な役割であるし、これから、研修期間中ベーシックなものをマスターすることに全精力を傾けていっても、いろいろなことを学んで身につけていきたいと思います。

研修後、国へ帰って、どういうことをするか、計画はまだはっきりわからないですが、日本で学んだものと自分のアイデアをうまくいかしていけば良いなあ……と思っています。特に、バース関係の仕事をするつもりでいます。というのは、マレーシアではバースを職業として描いている人があまりいないし、バースにおける表現の厳しさと技術はまだ一步足りないと思います。良いアイデアがあっても、紙上で表現できないのが非常に残念なことです。帰国すれば日本で学んだことが、有効に役立つと思っています。



写真

上：バース研修風景

下：5月27日、研修2ヶ月後の作品

XXXXXX

バース研修生を指導して

中野 俊章

4月1日から海外研修生として、マレーシアのン・フーランさん（黄 宝蘭、愛称ランさん1955年ペナン生まれ）を迎えて、バース研修を続けています。予定は9月までの半年がバース研修、その後3月までの半年がインテリア研修となっています。彼女の建築的知識とバースのことは、これからという状態ですが、それらについては出来る限りの良い資料を与えたいと心掛けています。作品も日本の良いものに沢山触れる機会を作りたいし、外国の作品も、例えば米国のTACのものや著名な建築家の作品も、スケジュールに合わせて紹介しています。

研修スケジュールの概要を記しますと、バース概論、ハンド・トレーニング、構図論、点とり、陰と影、色彩、水彩の基礎技法、点景、模写、設計図書による作品製作、最後に自由課題による作品製作としています。

習いごとは、バースに限らず何ごとも、本人のキャパシティと経験に左右されるものと思いますが、彼女はそれなりの意欲を取り組んでいますし、言葉のハンディもなく（これはマレーシアの国民性にもよるものでしょうが、日英中馬の4ヵ国語をマスターしているほどで）、スケジュールは何の支障もなく進行しています。彼女のことで特筆するなら、理解力の優れていることもありますが、彼女の素直さがこの研修をスムーズに進行させているとも言えます。又研修期間中は毎朝エスキースを行なうことにしています。私達の建築バースの分野でも、初步の段階では本人にとって「芸術はすべてゼロカウンターから」と言われるように、基礎的なものの積み重ねが必要であり、この研修では特にエスキースを組み込みました。これは観察力、構成力それに表現力を養成するのに欠かせない訓練の一つです。2ヶ月を経た現在は表現の仕方も随分と変わっていました。

この研修が、彼女の将来にどのように関連していくかは予測できませんが、これから指針の一つとして、何らかのインパクトを与えるものになればと思います。バース研修半年後の成果とその後が楽しみの一人です。

このようなバース研修が、国際的文化交流の一役を担っていることに思いを馳せる時、重要な意義と責任を痛感します。

* 清水建設設計部バース担当 * AR協会理事
* 労働省中央職業能力開発協会（建築透視図）技能検定委員

画材店点描

レモン画翠

デザイン部店長 加賀 敏博

私がレモン画翠に入社したのは11年前のことになりますが、その頃画材店のお客様といふと絵を描く方か、デザイナーの方ぐらいであったと思います。しかし5～6年前から設計関係のお客様が多くなり、私も営業担当として設計事務所・建築会社へ向う機会も増え、そこでいろいろなことを教えて頂きました。

最近の傾向としてプレゼンテーションのグレードが上がり、図面のグラフィック化・建築模型制作・バース等の表現方法の変化が出てきたため、より高度なテクニック、良質の材料、便利な道具が要望されるようになり、そこで画材店で扱う画材・デザイン材料の必要性が出て来たということです。

画材・デザイン材料は使用目的が多岐に亘り使い方によってはさまざまな効果が得られます。その反面種類が多くそのなかから使用目的に合う材料を選び出すことは容易ではありません。

そこでレモン画翠では、お客様に対し材料に関して良きアドバイザーに、又新商品等の情報提供に心掛けております。その一環として去る6月12日より3日間、各大学の学生さんの優秀作品を一堂に集め、「第4回学生建築設計優秀作品展」を開催いたしました。プレゼンテーション・テクニックに何らかの参考になったのではないかと思っております。

編集室



▼新緑の季節から梅雨の時期へと自然は日に日に変化を見せてています。長雨の晴れ間に季節の花の瑞々しさに心をよせてみたい、そんな今日この頃です。早いもので昨年の今頃は協会発足の土を耕し7月には記念の種をまいたものでした。今新芽は大地に根を張り、未来に向けて少しずつ成長しています。一本の枝葉が協会の活動であるとすればそれを支えて養分を与えるのは会員、準会員の働きである目に見えない土中の根であると言えます。前途いろいろ困難があるかもしれません、あせらずゆっくり長続きしていきたいと考えています」（尾上）

又当社営業担当者には至らない点多いかなと思いますが、伺いました際はどしどしご質問等ございましたら聞いて頂き、ともに勉強し、永いお付き合いをさせて頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

ミニコミ紹介

▼名譽会員の高須賀晋氏は、昭和55年度の日本建築学会賞を受賞された。氏の作品「生闇学舎」に与えられたものである。▼会員の技術向上、情報交換のためのシンポジウムが、6月2日(火)6時より主婦会館スズランにて開かれた。テーマは「バースペクティブの過去から今まで」講師には大野防氏が当たらなかった。40人以上の参加者があり、盛会のうちに終了した。▼第2回総会が6月26日(土)27日(日)と2日間、掛川市の妻恋にて開催される予定である。全会員の参加が期待される。

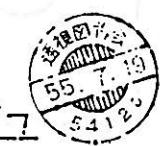
▼協会の企画の一つであるシンポジウムが去る3月26日(木)～3月28日(土)の間、工学院大学658号室にて催された。内容は基礎編応用編、実技編と分かれ、各課題には気鋭の協会員が講師として講義された。今回は、受講対象者が工業高校の教師等でしめられた。反響は大きく、協会内部からの受講希望の声も上がり、協会教育企画側では、夏休みを中心に次期ゼミナールを開催予定している。内容もさらに充実させたものを検討中である。▼企画のメインイベントの一つに協会バース展がある。目下各委員により会場搜しが行われ、内容が具体化するのも間近となっている。

▼今年3月には、恒例の技能検定試験が行われたが、この技能検定試験の「例題集」が発行されることになった。8月頃に、都道府県職業能力開発協会にて扱われる予定。一般書店での市販の見込みは今のところない。

新会員紹介

後日協会名簿が正式に発行される予定なので、今号も前号同様氏名のみとします。

東京会員 尾上利香、西島 勝、中村勝彦、田中啓子、大和裕美子
大阪会員 小西久雄、堀口憲嗣、橋本秀章、森 聖一、宮 後浩、山田文雄、吉村 黙



フロッタージュ

『バースとともに』②

岩崎 昇子

1965年頃の大企業の設計部は、今にして思えば実に目覚ましく新しい時代にぶつかっていたのでしょう。超高層ビルが建て始めしていました。当時日建設計にいらした福永氏の描かれたらしい銀座四丁目のあの円筒型総ガラス張りの三愛ビルの昼と夜景の2枚のバースを私は驚きをもって眺めたものでした。今でこそ総ガラス張りは、あたりまえになりましたが、当時の新米の私には、この先どんな建築材料が出てくるものか、恐ろしくもありました。ハーフミラーの使われ始めは、なしろ実際の建物を見たことがないですから、外国雑誌から想像するしかなかった訳です。又、ルーバーも当時よく使われました。細かいテクニックで苦労したわりには、バースの出来栄えに迫力が必ずしもありました。

さてそうした技術的な進歩もさることながら、その当時の竹中の設計部は実に良く、大小様々なコンペに参加しようと若い方が張り切り、正常業務とは別に、そうした時のバースの要求のされ方は、又一味違った勉強にもなりました。締め切り間近になって徹夜徹夜で練り上げられた設計者の思想に一步でも近づいて、しかも展示効果も出さなければなりませんから、そのケースケースによってどんな表現をしようかとやきもきし、後は祈るような気持ちで深夜まで頑張ったものです。ギリギリに限られた時間内で、冷静な判断と大胆な表現力、それに正確さ、自分で頭の中で一つの建築物を建てるような気迫で一気に描かなければ、なかなか観る人を感動させはしないでしまう。そして無事提出した時の開放感は経験した皆様にはお分かり頂けることでしょう。時は流れベテラン山澤氏は新しい分野を推し進めるべく退社され、速水さん、高橋さんも結婚され、私はアプアブ仕事に追いまくられながらも、この特殊な技術のおかげで仕事を通して外部の若手デザイナーの方々ともおつき合いさせて頂き、青春時代(?)のとても貴重な思い出になっているのです。